

# 月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.  
179



たまには(?)  
学園モノらしく制服トーク!

み～んな集まれ! ファルコム学園

英雄伝説 空の軌跡  
&

啄木鳥しんきのFalcom日和

ファルコムニュース

英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を

エステルとヨシュアの旅——再び

『空の軌跡 the 2nd』

2026年全世界同時発売が決定!

# FALCOM MAGAZINE CONTENTS

## 2 目次

4 2026年全世界同時発売が決定!!  
『空の軌跡 the 2nd』

6 も〜っと集まれ! ファルコム学園  
新久保だいすけ

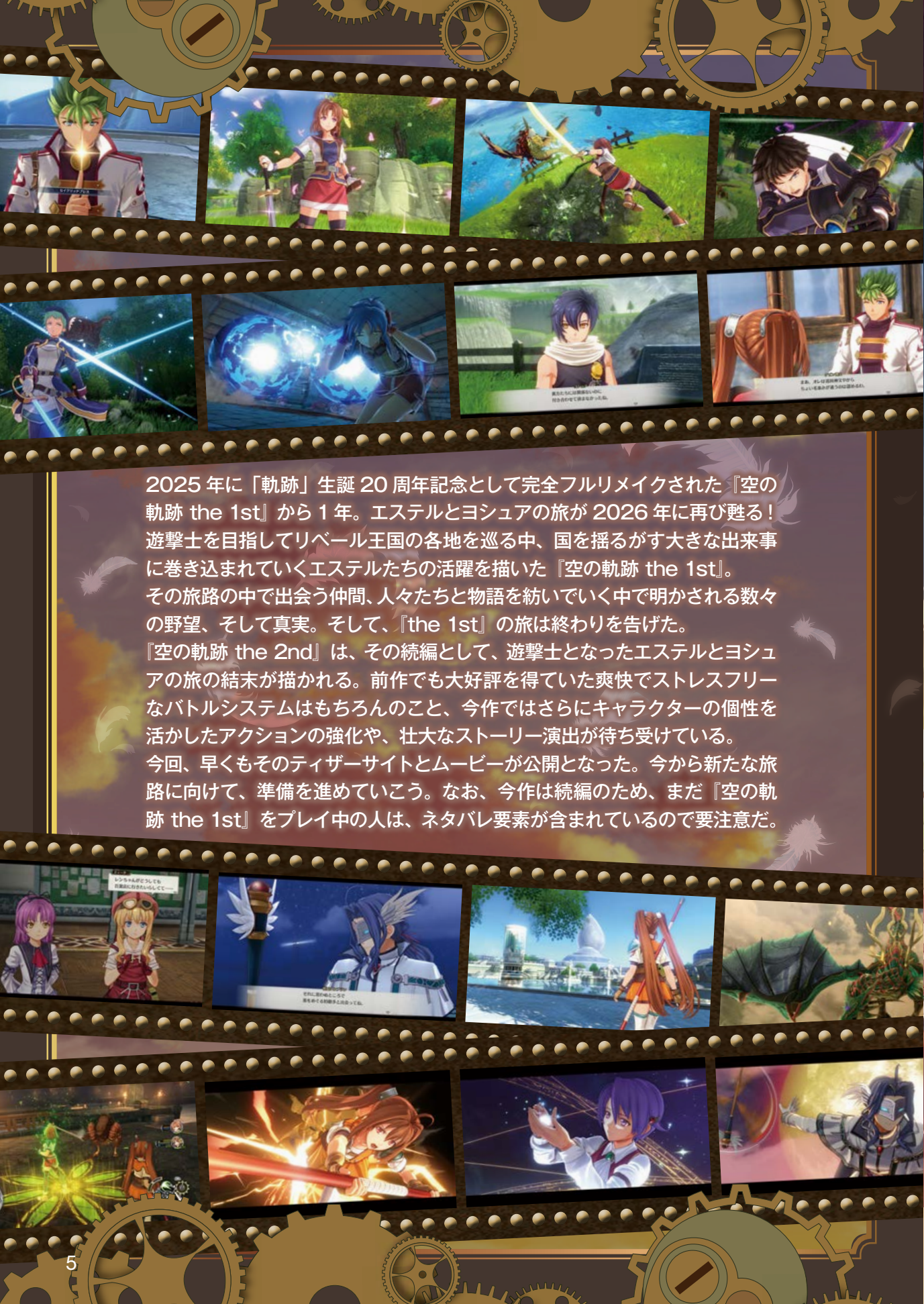
16 ファルコムニュース

19 英雄伝説 空の軌跡  
啄木鳥しんき

55 啄木鳥しんきのFalcom日和

56 英雄伝説 零の軌跡  
午後の紅茶にお砂糖を  
著:むらさきゆきや イラスト:窪茶





2025年に「軌跡」生誕20周年記念として完全フルリメイクされた『空の軌跡 the 1st』から1年。エステルとヨシュアの旅が2026年に再び甦る！遊撃士を目指してリベール王国の各地を巡る中、国を揺るがす大きな出来事に巻き込まれていくエステルたちの活躍を描いた『空の軌跡 the 1st』。その旅路の中で出会う仲間、人々たちと物語を紡いでいく中で明かされる数々の野望、そして真実。そして、『the 1st』の旅は終わりを告げた。『空の軌跡 the 2nd』は、その続編として、遊撃士となったエステルとヨシュアの旅の結末が描かれる。前作でも大好評を得ていた爽快でストレスフリーなバトルシステムはもちろんのこと、今作ではさらにキャラクターの個性を活かしたアクションの強化や、壮大なストーリー演出が待ち受けている。今回、早くもそのティザーサイトとムービーが公開となった。今から新たな旅路に向けて、準備を進めていこう。なお、今作は続編のため、まだ『空の軌跡 the 1st』をプレイ中の人は、ネタバレ要素が含まれているので要注意だ。

# the 空の軌跡 2nd

ソラノキセキ ザ・セカンド



「ふたりはいつか また逢える——」  
『空の軌跡 the 2nd』  
2026 年全世界同時発売が決定！

空の軌跡 the 2nd

- ジャンル: ストーリーRPG
- 対応機種: Nintendo Switch 2、Nintendo Switch、PlayStation 5、Steam
- 販売価格: 未定
- 発売時期: 2026年

『空の軌跡 the 2nd』ティザーサイト

<https://www.falcom.co.jp/sora2/>



★制服って着なくなると急に慣れはじめるよね★

## 学生な気分



## いろんなお楽しみ



## FALCOM 新久保だいすけ ファルコム学園

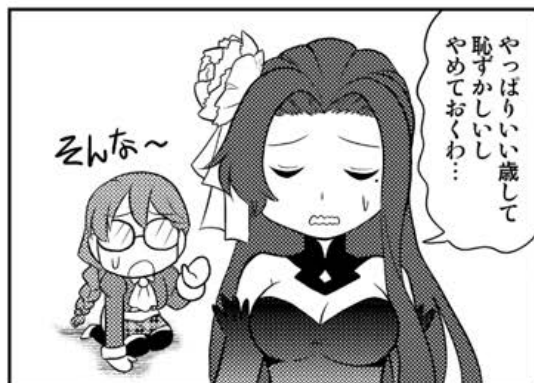




## 髪下ろすのいいよね…



## 恥ずかしい大人たち



## 憧れの学生生活



## 対立の序曲





## 理事長の野望



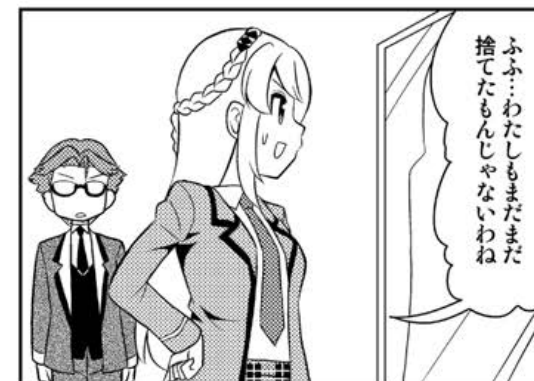
## 制服いろいろ



## 先生な気分



## 乙女と制服





## 潜入するボクっ娘



## 怪人と連帯感



## 騎神と会長と制服と



## 爛れた四角関係







英雄伝説

# 閃の軌跡06

原作/日本ファルコム  
脚本/恵村まお 漫画/さがら梨々  
A5判 160P 定価:本体991円+税  
ISBN 978-4-8021-3123-0

©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.  
©SAGARA RIRI 2018

**好評発売中!!**

エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐!  
時代が選ぶのは果たして誰か!?  
そして友という絆に背を向け、  
両雄相まみえる!

**激動のクライマックス!**

日本ファルコム創業40周年を余裕で超えても、尽きることなく怒涛の勢いでニューカマーが押し寄せるファルコム学園! いつまで続くのかこの進撃! そして天才・新久保だいすけに果たして限界はあるのか!? 様々な難問に挑戦し続けるご存知“ファル学”第4巻!

実は、計10冊目の  
『ファルコム学園』!



も〜っと集まれ!

## ファルコム学園④

新久保だいすけ

定価: 本体 909 円+税  
ISBN 978-4-8021-3387-6

©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©DAISUKE ARAKUBO ©FIELD-Y

発行: フィールドワイ  
発売: メディアパル

フィールドワイ公式HPはこちら → [www.field-y.co.jp](http://www.field-y.co.jp)  
ファルコムブックス公式HPはこちら → [www.field-y.co.jp/falcombooks](http://www.field-y.co.jp/falcombooks)

発行: フィールドワイ  
発売: メディアパル

フィールドワイ公式HPはこちら → [www.field-y.co.jp](http://www.field-y.co.jp)  
ファルコムブックス公式HPはこちら → [www.field-y.co.jp/falcombooks](http://www.field-y.co.jp/falcombooks)



## 『空の軌跡 the 1st』『界の軌跡』グッズ発売!

Yahoo!ショッピングのオフィシャル倶楽部MAGにおいて、「空の軌跡 the 1st」「英雄伝説 界の軌跡 -Farewell, O Zemuria-」の新グッズが登場。



■発売元：株式会社ヴィータ・ソリューションズ

特設ページ [https://store.shopping.yahoo.co.jp/ofc-mag/falcom.html?sc\\_i=shopping-pc-web-category-storeitm-sort\\_md1-sortitem&X=99](https://store.shopping.yahoo.co.jp/ofc-mag/falcom.html?sc_i=shopping-pc-web-category-storeitm-sort_md1-sortitem&X=99)

## <Falcom jdk BAND LIVE 2026>開催決定! 主題歌『星の在り処』『空の軌跡 the 1st』バージョン世界初生演奏!!

2026年2月7日(土)、東京・赤羽ReNY alphaでフルライブ開催決定。ライブ開場前の2時間はフリー入場の物販もOPEN。ライブチケットをお持ちでない方もご利用いただけます。全曲新アレンジ・新録音で贈るファルコム45周年記念アルバム『Falcom アコースティックス 3』を会場にて先行発売!



チケット好評発売中!

■日時：2026年2月7日(土) 開場16:30/開演17:30  
※開場前のフリー入場物販 14:00~16:00  
■会場：赤羽ReNY alpha (JR赤羽駅 東口より徒歩1分)

特設サイト

<https://www.falcom.co.jp/jdk/2026/>

## 全曲新アレンジ・新録音で贈る ファルコム45周年記念アルバム 『Falcomアコースティックス3』3月9日発売!

「ソーサリアン」のボーカルナンバー『Josephine』や「イースII」の代表曲『LILIA』、『XANADU』の『-LA VALSE POUR XANADU-』といった数々の名曲を新規アレンジ。さらに、ボーナストラックとして「奇跡の軌跡VI Falcom jdk BAND LIVE ASIA TOUR 2025」のために編曲・収録された『星の在り処』のJapanese ver./Chinese ver.を収録!

ゲームミュージックファンだけでなく、音楽を楽しむすべての人に聴いていただきたい、という想いを込めて制作した『Falcomアコースティックス3』。耳で演奏してくれているような“リアルな音”をぜひこの機会に体感してください。



ファルコムショップ

<https://falcom.shop/products/detail/767>

■発売日：2025年3月9日

## ▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ!

## ファルコムのLINE絵文字第6弾「ポム」発売!

軌跡シリーズに登場する魔獣「ポム」がLINE絵文字になりました!



スタンプ

<https://store.line.me/emojishop/product/6915893f0e2a9a7c4393f042/ja>



“輝く環”を目指す一行の前に結社《身喰らう蛇》の執行者たちが次々と現れる。  
エステルとヨシュア、アガットの前に立ちはだかる《剣帝》レオンハルト。  
かつて兄と弟のように育ったレーヴェとヨシュアが、万感の思いを込め剣を交える！

# 空の軌跡、ここに完結！

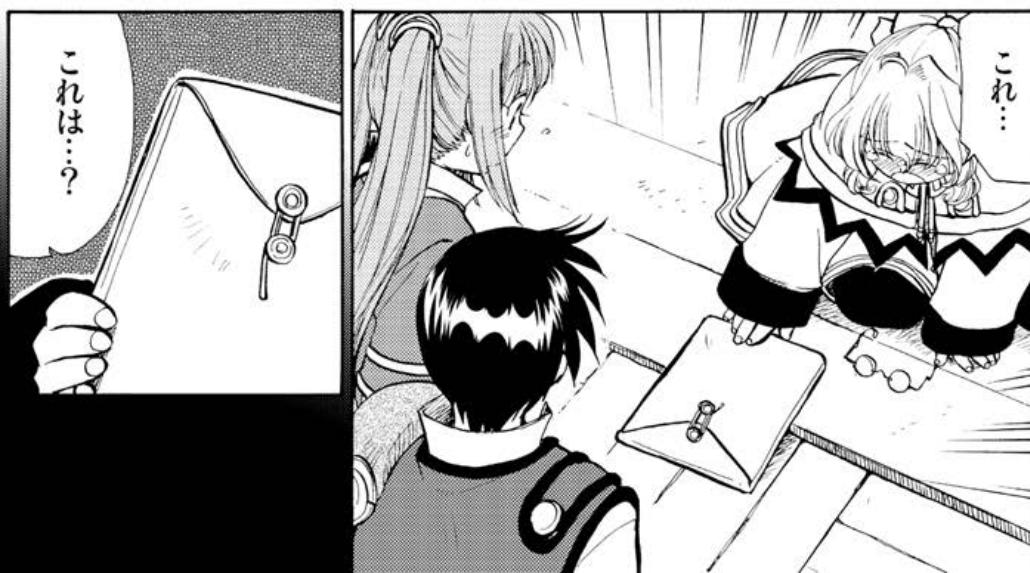


## 英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～ ⑦ 啄木鳥しんき

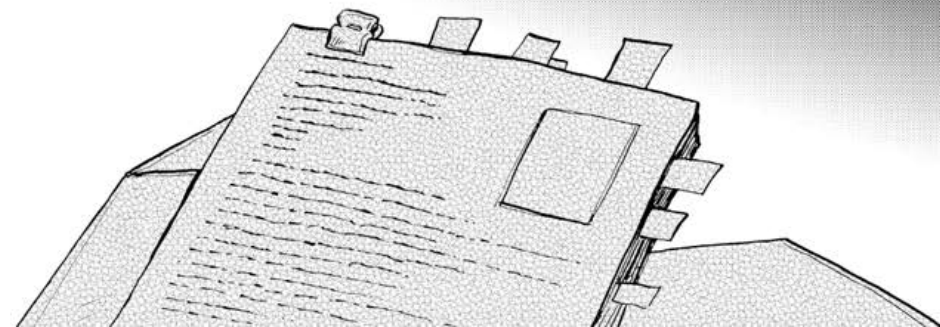
定価：1,210円(本体1,100円+税) ISBN 978-4-8021-3516-0  
発行：フィールドワイ 発売：メディアパル

©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.  
©Kitsutsuki Shinki  
©FIELD-Y

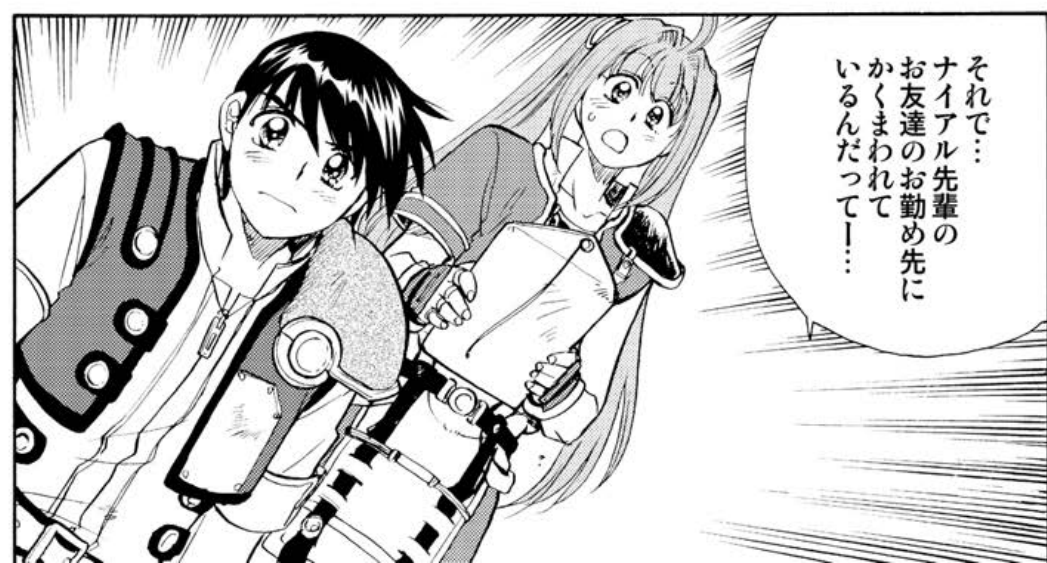
www.field-y.co.jp













エルベ離宮は  
王都東部の  
森の中にある  
リベール王家の  
小宮殿です

しかし現在は  
情報部が  
テロ対策の  
捜査本部として  
使用しており

敷地どころか  
森の周遊道に至るまで  
情報部以外の立入りが  
禁止されているのです

そこに  
人質の  
みんなが!?

はい

ドロシーさんの  
証言で  
私も確信が  
持てました

人質とはいえ  
クロード殿下は  
王族の女性です

もし…  
リシャール大佐に  
わずかでも  
王国への忠義心が  
残っているならば…

殿下の監禁場所は  
エルベ離宮以外  
ありません!

お願い!!

ついでに  
先輩も  
助けて  
あげてー!!

なるほどな

この森の異常な  
魔獣の質と数には

そういう裏が  
あったわけか!

こんな森を  
ひとりで  
通り抜けようと  
するなんて

ナイアル  
無事に離宮に  
たどり着けてれば  
いいんだけど…

いや…むしろ  
たどり着けてない方が  
いいのかもしれない…

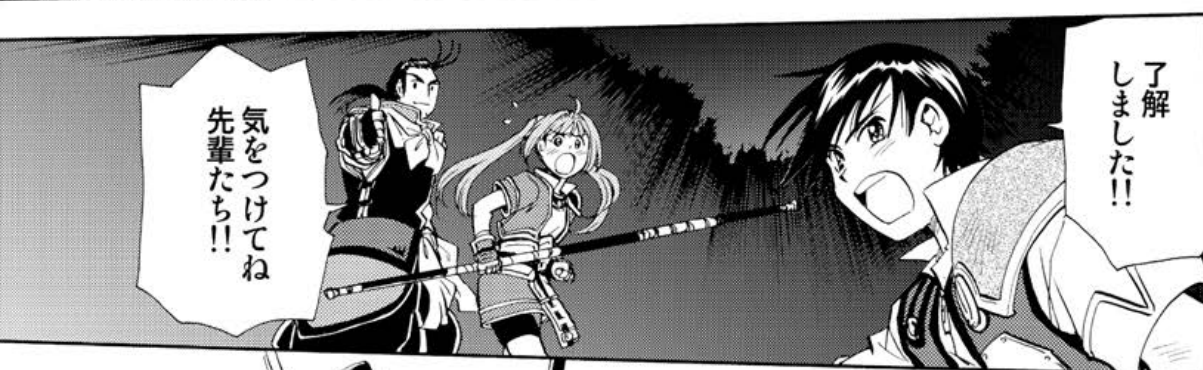
ナイアルさんが  
離宮で情報部に  
拘束されたとして

もし彼が  
報道関係者で

これまでの  
事件の真相をすべて  
知ってることが  
バレてしまったら…

情報部は  
彼を放ってほ  
おかないよ

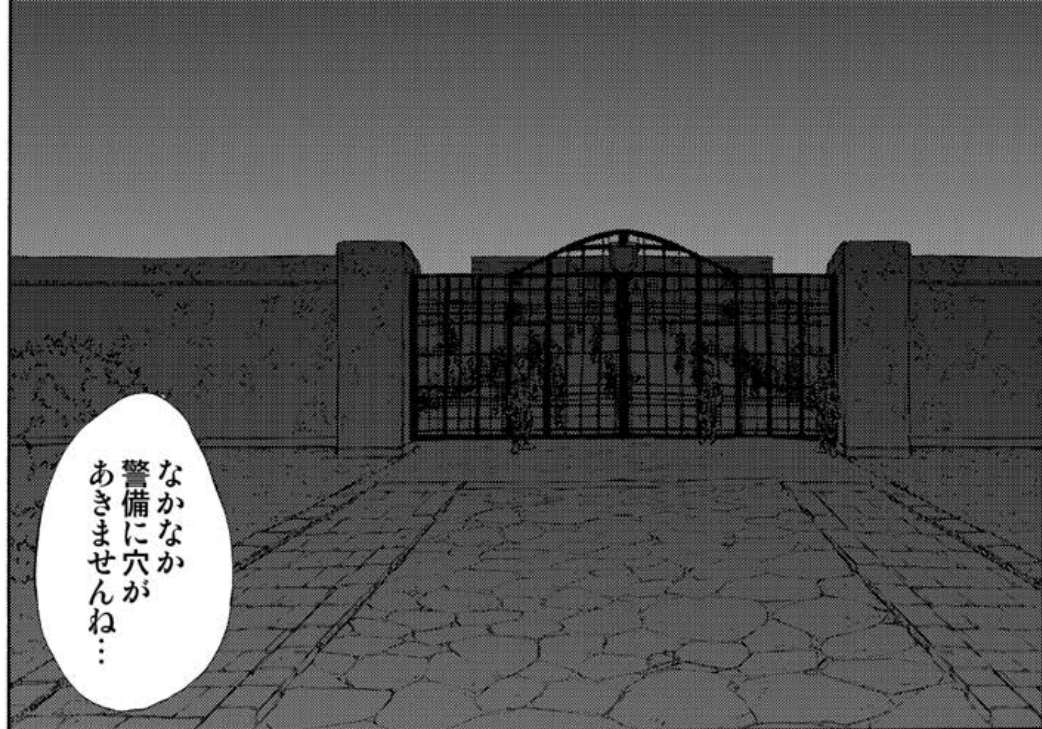












なかなか  
警備に穴が  
あきませんね…



でもカルナさん達の  
方にも相当な数の  
黒装束が  
行ったわよ？

これ以上  
相手させる  
なんて  
無理だわ！



まだかなりの数の  
特務兵が離宮内に  
残っていると思います

俺達が  
突入する分には  
構わんのだが…  
大勢の人質を  
守りながら  
脱出することまで  
考えたらあの数は  
ちっと厳しいな…



なるほどな



…あと一息…

せめて  
入口付近の  
一団だけでも  
はければ

少しは勝算が  
出てくるんだけど…



周遊道  
北方面に  
新たな敵影  
確認!!

…いよいよ  
本腰入れてきた  
みたいだよ!!



へっ!!

腕が鳴るぜ!!

いや…  
もつと  
いるか

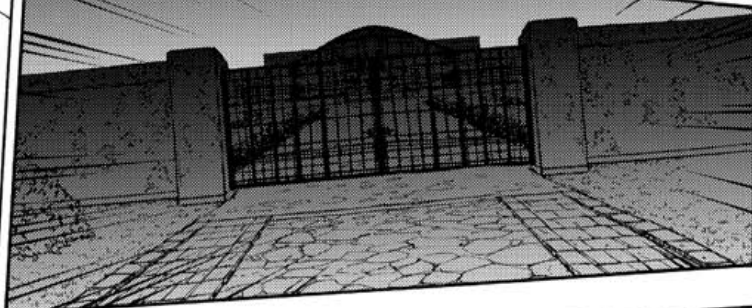
9人…

8…

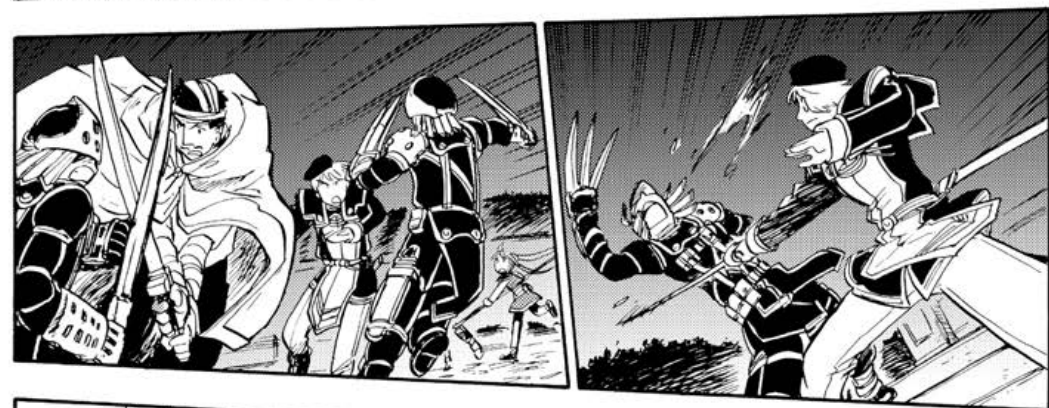
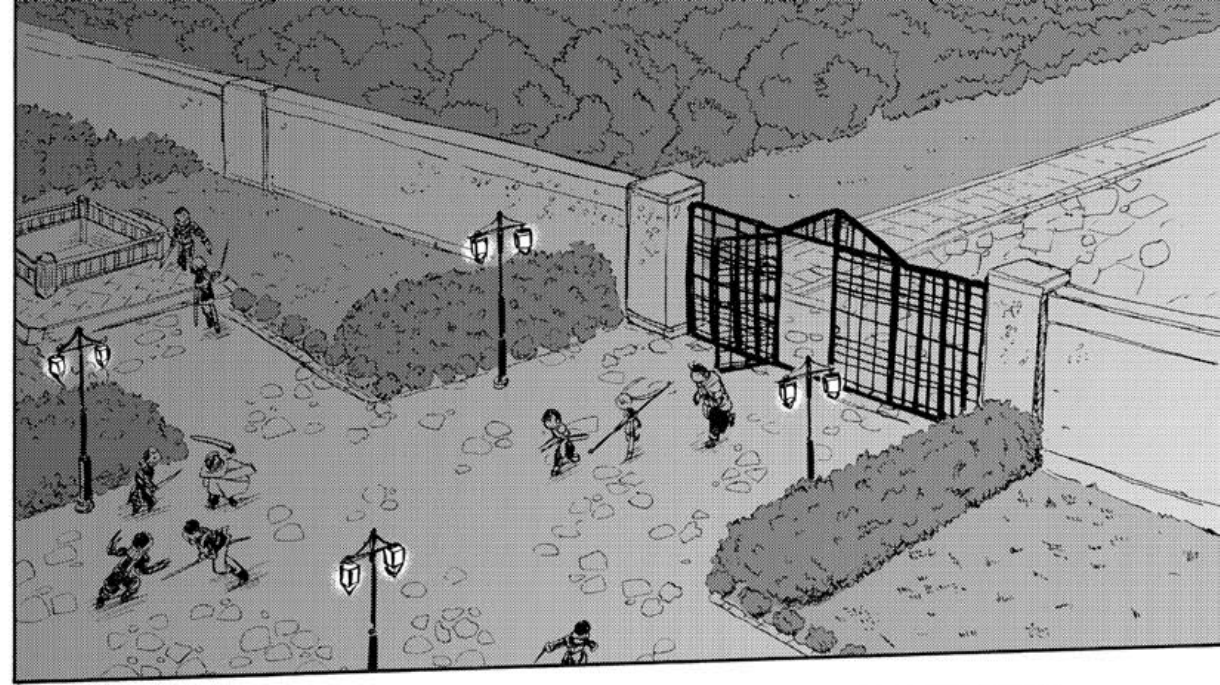
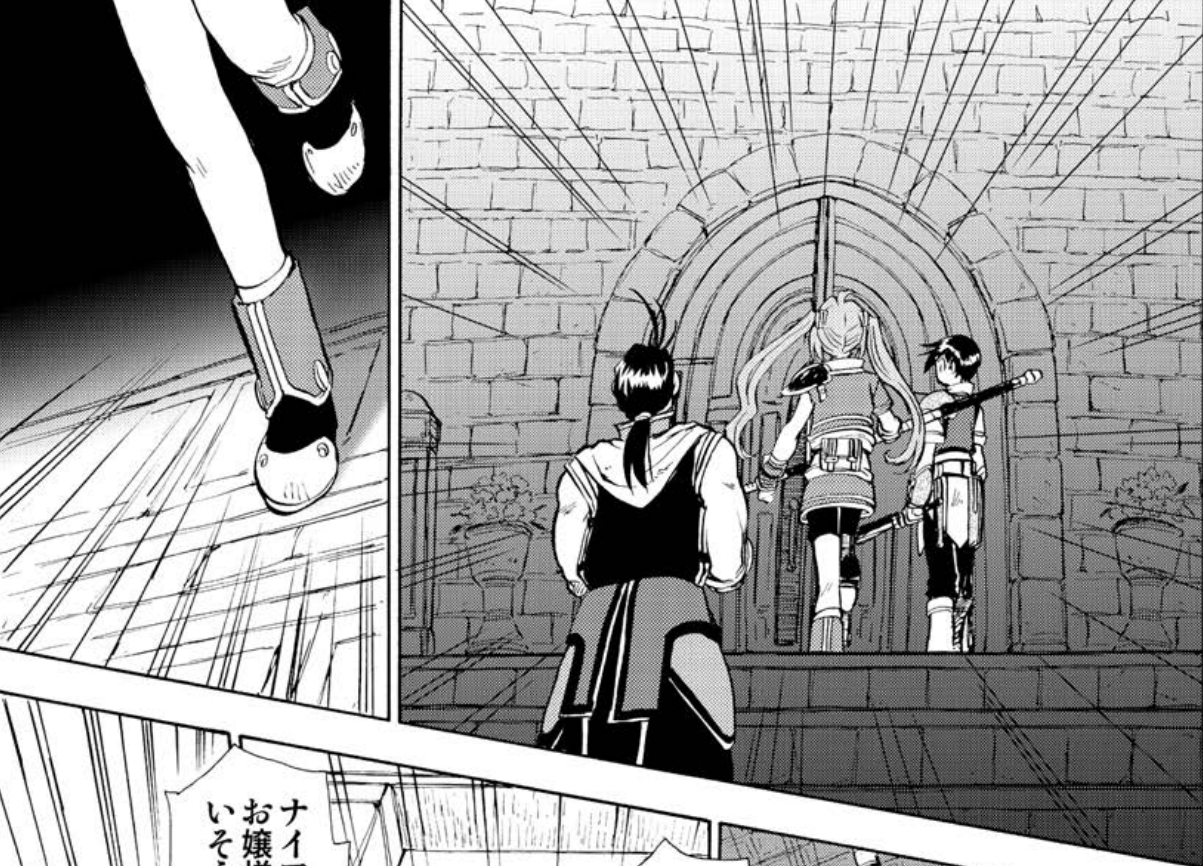




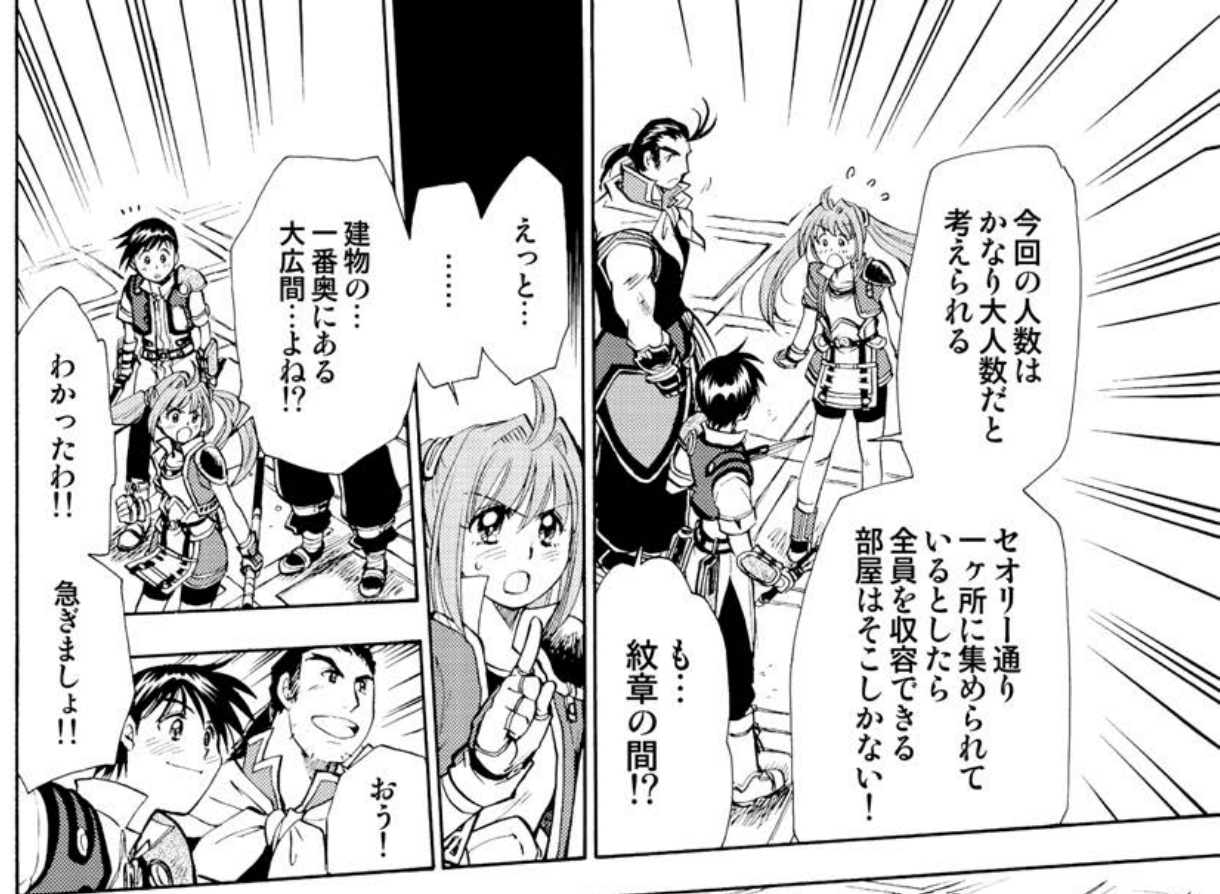








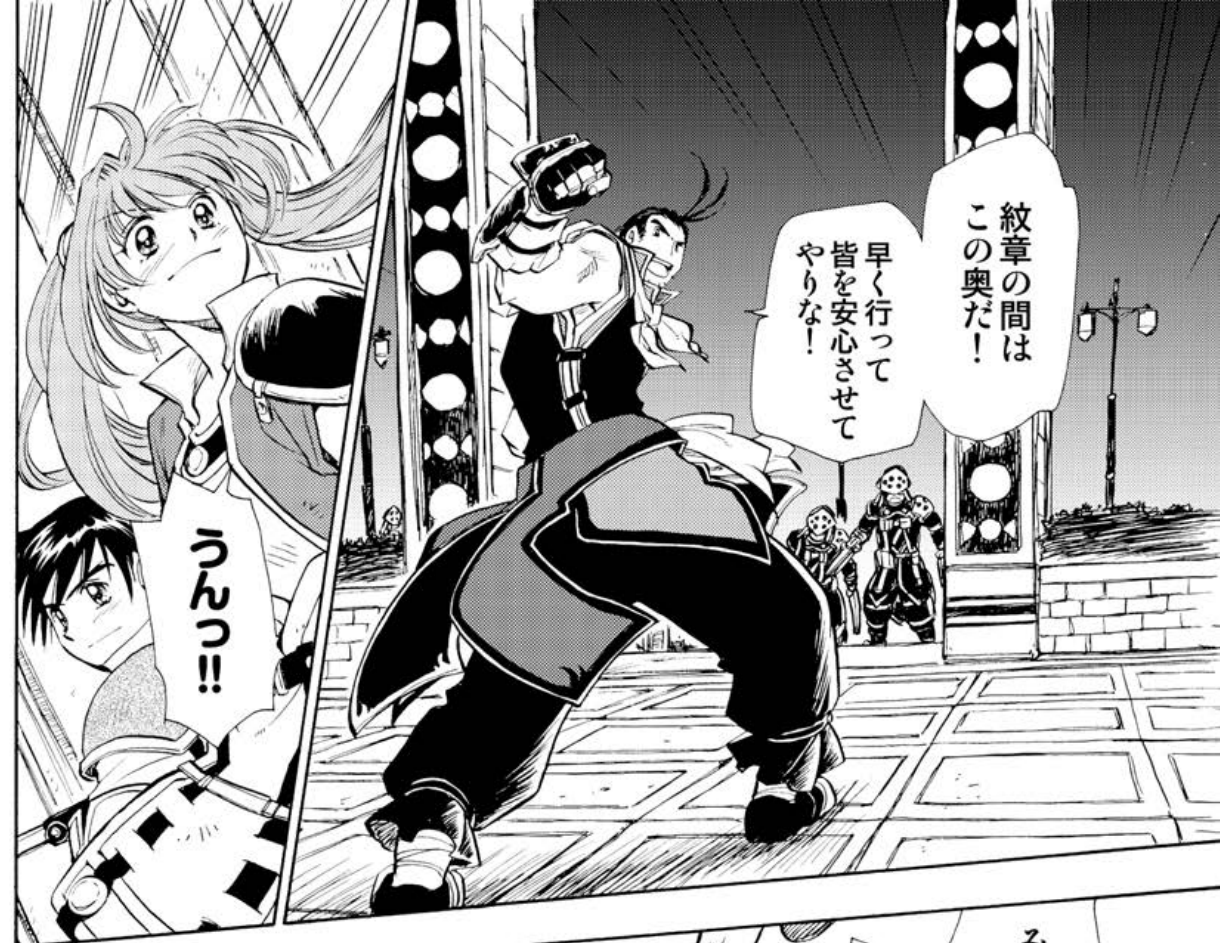




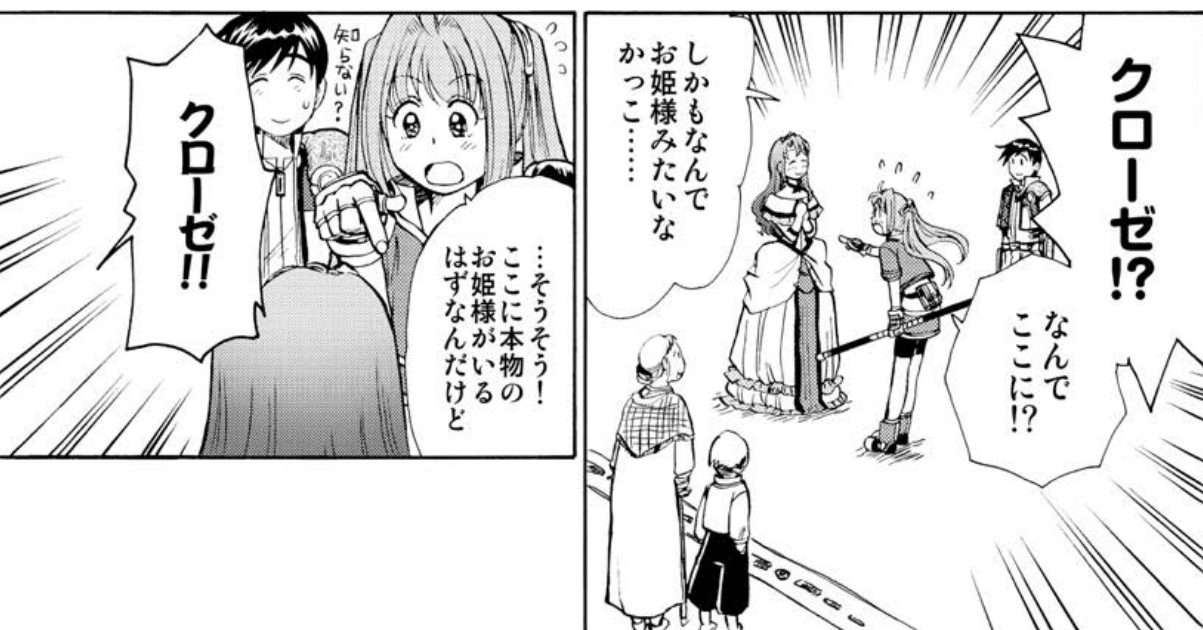




















人質が  
解放された  
だと!?

我々はまだ  
グランセル城に

最高クラスの  
人質が  
いるのを  
忘れたか!?



まさか…  
女王陛下を!!

お祖母様に  
何を  
する  
つもりですか!!

さあな

だが  
こうなつた以上は  
もう無事では  
いられんだろうよ



不幸にも  
陛下は重い病に  
臥せっておられる…

もしかしたら  
病状が悪化して

今日にでも  
お命を落とされる  
ということも  
あるかもな…!!



さあ!

ジーク!



大切な人の帰りを  
待ちわびるご家族に  
皆の無事を  
知らせよう!

すまないが  
いま一度

女王陛下に  
この朗報を  
届けてくれるか!



そっか

ジークが  
……!!

女王陛下によって  
人質が解放された  
ことが伝われば  
沈黙していた  
軍の幹部達が  
一斉に事件解決に  
動き出すでしょう

これですべて  
うまくいく  
はずです!





女王様は  
絶対…

だから…  
みんなも

あきらめないで!!

あたしたちが  
守ってみせるから!!



いくわよ!!  
ヨシユア!!



貴様!!

一定時間毎の  
定期連絡が  
途絶えれば

それが離宮に  
異変が起きたと  
いう合図になる!!

グランセル城にいる  
我が同胞に  
事が伝わるのも  
時間の問題だろう!!



今から城に  
急いだ  
ところで  
もはや  
女王は  
救えまい!

もう  
何もかもが  
遅いんだよ!!



そんなこと  
させない!!

まだ  
終わってなん  
かないわっ!!









すごい力を持ってる人たちの中で、  
武器もなく、必殺技も繰り出さず  
でも、世界の理不尽と戦っている  
一般人のオイアレさんに、  
「未だあ  
めっちゃ、惹かれます。  
信念がある人ってほんま、かっこいい。  
現地で走り回って取材して、  
夜も眠らずに原稿書くんだろうな...  
身体が資本だぜオイアル(^\_^)



どうして  
こんな時に...!!

もうっ!!

情報部の  
飛行艇!!

次回に続く



# 英雄伝説 零の軌跡

午後の紅茶にお砂糖を

特務支援課メンバーが過ごす

クロスベル自治州のゆる～い(?)日常!



©YUKIYA MURASAKI, KUBOCHA

第7回

エレボニア帝国とカルバード共和国という大国に挟まれながらも、自治州として独立していたクロスベルを舞台とした『零の軌跡』、『碧の軌跡』シリーズ。続編となる『閃の軌跡』、『創の軌跡』においても激動の中にあり、様々な壁が立ち塞がっていたが、怯むことなく立ち向かっていったのがロイド・バニングス率いる特務支援課メンバーだ。そんな特務支援課メンバーが、もしかしたら過ごしていたかもしれない日常を描く、魅力たっぷりの一冊をご堪能あれ!

製品情報

好評発売中

著 : むらさきゆきや  
イラスト : 窪茶  
定価 : 1,210円(税込)

「どうしたのかしら? いつもより待ってる人が多いみたいだけれど……」

エリイが首をかしげた。

列の先頭にならんでいる青年が、こちらに気づいて声をあげる。

「おお! あんたら、支援課だろ!? なんとかしてくれよ!」

ロイドたちは駆け寄った。

「どうかしましたか!?!」

「時間を過ぎても、バスが来ないんだよ! こっちは仕事があるってのに!」

他のならんでいる人たちも口々に文句を言いだした。



落ち着いてください、すぐ調べます——とロイドは請け負う。

あつ、とティオが指を差した。

「ヨアヒム先生です」

最初は気づかなかったが、列の最後尾にらんでいる白衣の男は——医師のヨアヒムだった。

「いや、君たち、こんなところで会うなんて奇遇だね」

「こんにちは！ こちらにいらしたんですか、ヨアヒム先生」

「ん？ その様子だと、僕に用事があるのかな？」

「はい。ウルスラ病院から、マインツへの到着が遅れているようだから様子を見てきて欲しい」と依頼されて

ヨアヒムが苦笑する。

「いや、まいったな……ちよつと、いいポイントを見つけちゃったものでね」

「やっぱり、釣りをしてたんですか……」

「こればかりは、やめられなくてね！ だけど、健康診断は研修医のリットン君に任せたから大丈夫のはずなんだけどね……行つてないのかい？」

「え？ 先に向かったんですか？」

「いくら僕が釣り好きとはいえ、忙しい鉦夫たちを待たせるわけにはいかないからね。リッ

トン君に、いいかね、今から君に研修課題を出すよ——マインツで健康診断をして、その結果をレポートとして提出したまえ」と……」

ロイドたち全員が呆れていた。

やれやれ、とヨアヒムが首を左右に振る。

「研修医ともなれば、それくらいやれなくてはね。まったく困ったものだよ」

「……困ったものなのは、ヨアヒム先生のほうかと」

ぼそり、とティオがつぶやいた。

ロイドは少し考えて――

「徒歩で行ってみるしかないな」と結論づけた。

エリイが観念したように、うなづく。

「導力バスが故障したのかもしれないものね。乗客は外に出なければ安全だと思うけど、動けなくなっているかもしれないわ」

「……そうですね。今のわたしたちであれば、問題なくクロスベルかマインツへ護衛できるかと。街道には、さほど強い魔獣はいませんか」

ティオの言うとおりだろう。

ランディもうなづく。



「ふい、しゃあねえな！ マインツまでだと、けっこうな距離になっちゃうが、体力つけるには、ちょうどいいハイキングになるだろ！」

「はは……そうだな。警察学校でのサバイバル訓練を思い出すよ」

「俺も警備隊を思い出すぜ」

意気投合するロイドとランディに対して、エリイとティオは歩きはじめる前から疲れたような顔をしていた。

リーシャは、ずっと嫌な予感を抱えていた。

徒歩で行くと決めたロイドが、こちらへと視線を向ける。

彼は丁寧な頭を下げた。

「すまない、リーシャ、シユリ……トラブルが起きたようだ。バスは来ないし、今日はここで――」

「私も行きます！」

「えっ!？」

リーシャは真剣な口調で告げた。ロイドたちだけでなく、シユリまで驚いて目を丸くする。

「なんだよ、リーシャ姉!? そんなにマインツに行きたいのか!？」

「いえ、そういうわけじゃなくて……あの、その……直感というか……」

（ああ、どう説明したら……!?)

リーシャは苦悩する。

ロイドがうなった。

「うーん、街道なら徒歩でも危険は少ないと思う……でも、どうしてもそんなに行きたいんだ? マインツに用事があるわけじゃないんだろ?」

「それは……悪い予感というか……」

「え?」

リーシャは頭をかかえる。『銀としての直感が、危険を察知しているのな』と言えたら楽なのだが、そんなことは、寝言でも口走れない。

しかし、放ってもおけない気持ちだった。

意を決して――

「ううう……あ、あの！ 私、ダイエット中だから、ちょうどいいかなと思ひまして！ハイキングとか、体力もつきそうですし！」

「ダ、ダイエット?」

ぽかん、としてるロイドに対して――



ハッ、とシュリが顔色を変えた。

「体力!? そういうことか、リーシャ姉! おい、オレも行くぜ」

「シュリまで!」

「イリアさんに、<sup>／＼</sup>早々にへばるんじゃないわよ?<sup>／＼</sup>って言われたんだ。それって、オレに体力がないって意味だろ!」

「まあ……そう取れなくもないと思うけど……」

うん、とシュリがうなづく。

「なるほど、ハイキングか。これぞ、有意義な休日の使い方って感じだよ。劇場の中じゃできないことだ」

「待ってくれ、シュリ……ここから、マインツまでは、かなりの距離がある。子どもの足では――」

「はあ? オレは毎日、アルカンシエルで特訓を受けてるんだぞ。そのチビッコよりは歩ける自信があるぜ」

いきなり天秤に掛けられたティオが、口をへの字に曲げる。

「……もしかして、チビッコというのは、わたしのことでしょうか? 非常に不本意なのですが」

「とにかく、あんたたちと一緒に安全なんだろ? なら、いいじゃんか」

押し問答していると、バスを待っている人たちが、ざわつきはじめた。「イリアさん?」「アルカンシエル?」「あれって、リーシャ・マオじゃ?」「まさか。スターがマインツなんて行くわけないだろ」「でも……似てるよなあ……?」

エリイがロイドに耳打ちする。

「ちよつと、まずいわよ? 騒ぎになっちゃうわ」

ティオもささやいた。

「ロイドさん……置いて行きましょう」

「まあ、行きたいって言うなら、いいんじゃないの? このふたりなら<sup>／＼</sup>途中で休憩<sup>／＼</sup>なんて言い出さないだろうし……道中の安全は、このランディ・オルランドにすべて任せなさいって!」

魔獣のマの字もないような場所だというのに、巨大なスタンハルバードをぶんぶんと振り回す。

シュリが肩をすくめた。

「まあ、ダメだって言うなら、リーシャ姉とふたりで勝手に行くけどな」

街道を徒歩で行くことが禁止されているわけではない。

ロイドが降参した。

「はあ、仕方ない……ただし、安全第一だ。俺たちの言うことは聞いてもらうからな」



「いいけど、変なこと命令するなよ？」

「するわけないだろ!？」

ぺこり、とリーシャは頭をさげる。

「すみません、ロイドさん。わがままを言ってしまったて……シュリちゃんの話は、私が面倒を見ますから」

「うん。俺たちも気をつけるけど、よろしく頼むよ」

「はい……」

リーシャは、シュリと一緒にできれば、ひとまずロイドたちと分かれ、《銀<sup>イ</sup>》の姿になってから追いかけることもできたのだが。

（ううん……シュリちゃんの話は、イリアさんに頼まれたんだから）

ぐっと気を引き締める。

（なにが待ってるかはわからないけれど、私が、シュリちゃんもロイドさんたちも守らないと!!）

「おお、リーシャ姉が真剣だ……やっぱりハイキングって、効果的な練習なんだな」  
いろいろとシュリに誤解されている気がした。

できるだけ急いだほうがいいのは間違いないが、到着したときにバテバテでは意味がない。

ロイドは、魔獣との接触を避けつつ、みんなの調子を気にしながら進んでいった。

最初はシュリのことを一番心配していたが、すぐに大丈夫だとわかった。

アルカンシエル<sup>オーパルスタッフ</sup>のふたりは十分に健脚らしい。

むしろ、大きな魔導杖<sup>オーパルスタッフ</sup>を持っているティオのほうが、大変そうだった。

「すこし休憩しようか？」

「……問題、ありません……はあ、ふう……このくらい、へっちゃらです」

「うーん、そうか。無理はしないでくれよ、ティオ」

「もちろんです、ロイドさん……はふっ……」

山の中を進んでいた一行だが、ぐるりと左へ曲がったところで、視界が開けた。  
マインツの山々を眺めることができる場所だ。

「すごい……」

シュリが立ち止まり、その景色に目を奪われていた。

その横にリーシャもならんで、うなづく。

「街を少し出るだけで、こんなにも素敵な場所があるのね」



「ん？ リーシャ姉は知ってたんだろ？」  
「ゆっくり立ち止まったことはないから……」  
「あ、そうか……こんなところ、ふつうなら徒歩で来ないもんな」  
「ロイドさんたちに感謝しないと……あ！ ごめんなさい、つい見入ってしまった」  
「いや、そろそろ休憩しようと思ってたから、ちょうどいいよ。だいぶハイペースで来たからな」

ティオは魔導杖を支えにして、なんとか、しゃがみこむのに耐えていた。  
エリイのほうも、汗をハンカチでぬぐっている。

ランディは重たいスタンハルバードを担いで、まだ余裕がありそうだった。それとなく、周囲を警戒してくれている。

「バス、見かけなかったなあ？」

「トラブルから回復して、もうマインツに向かったのかもしれないな」

「ちよいと樂觀的な気もするけど、意外とそんなところかもな」

ランディが肩をゆすって笑う。

ティオが魔導杖を掲げた。

「見晴らしもいい場所ですし、付近をサーチしてみます」

「もう大丈夫なのか？」

「……わたしは、最初から問題ありません。子ども扱いされるのは心外です」  
シュリを意識しているのか、いつも以上にティオが意地を張っている。  
すこし心配になるロイドだったが、ここは信頼することにした。

「じゃあ、頼むよ」

「はい……」

ティオがうなずくと、シュリが物珍しそうに尋ねてくる。

「なんだ？ なんかやるのか？」

「だ、だめよ、シュリちゃん……お仕事の邪魔をしたら」

リーシャがたしなめた。

とはいえ、なにをするかくらい教えてあげてもかまわないだろう。

「ティオは特別なセンサーを持っていて、その感度を高めることで、かなり遠くのことも把握できるんだ」

「マジかよ!? すげえじゃん！ ただのチビッコじゃなかったんだな！」

シュリが瞳を輝かせて賞賛した。

魔導杖を構えたまま、ティオが赤面する。

「こ、これくらい……どってことありません……」

ちよつぷり得意そうな様子に、ロイドたちは苦笑してしまった。



おほん、とティオが、わざとらしく可愛い咳払いをする。

「……すこしだけ、静かにしててください」

「おう、わかった！」

うなずくと、シュリは両手で口元を押さえた。

他のメンバーも固唾を吞んで見守る。

風の音と、鳥の鳴く声がした。

「アクセス。……感度、最大……付近をサーチします……」

ティオの髪飾りの三角部分が、赤く明滅しはじめる。

魔法陣が浮かび上がった。

穏やかな青白い輝きが、彼女を包んだ。

そして――

「ッ!？」

「ティオ、なにかわかったのか？」

「この先で、魔獣が戦っている音がしました！ それと、金属音も……」

「なんだって!？」

「距離は、20セルジュほどかと」

「それなら一息に走れるな……行こう、みんな！」

「はい」

「わかったわ！」

「おっしや、急ごうぜ！」

ロイドの呼びかけに、ティオ、エリイ、ランディが声をあげた。

リーシャとシュリもついてくる。

「シュリちゃん、魔獣がいたら、絶対に私から離れないで」

「わかってるって！」

ほどなく、ロイドたちの耳にも、戦いの音が聞こえてきた。



停留所の手前、吊り橋をくぐった直後の場所に、バスの姿があった。

あんなところで停まる予定はないはずだ。

白煙をあげている。

ガシャン！ ガシャン！ と金属音がしていた。

ロイドは目を見張る。

「魔獣だ！」



「でかいぞ！　よりによって、バスを攻撃してやがる！」  
ランディがスタンハルバードを構えた。

バスのなかで乗客が助けを求めているのが、窓越しに見えた。  
たちこめる白煙のせいで、その顔まではわからないが……  
ティオが警告する。

「バスの導力機関が燃えているようです……車内に火が移る可能性もあり、あのまま乗っているのは危険かと！」

「バスを壊すなんて……街道の魔獣とは思えないわ……」

エリイが緊張した声をあげた。

ロイドは思考を巡らせる。

バスの乗客の安全が最優先だが、そのためには魔獣を遠ざけなくては。

「まず、魔獣を引き離す！　それから、バスの乗客を避難させるんだ！」

自分とランディが魔獣と戦い、ティオとエリイに乗客の誘導をしてもらおう——そう指示しようとしたとき、後ろからリーシャの声がした。

「ロイドさん！　私たちがバスに乗ってる人たちを避難させます！」

「えっ!？」

「あの魔獣、手加減できる相手じゃありません！」

「わ、わかった……頼む、リーシャ！」

ロイドは仲間全員で、魔獣へと向かった。

リーシャが魔獣の強さを感じ取った理由はわからない。

しかし、バスを破壊してしまうほどの魔獣だ。かなり危険な相手なのは間違いないかった。

その魔獣は、紫色の頭を持ち、筋肉の塊のような身体を上半身だけ、地面の穴から出していた。

見えている上半身だけでも、ロイドより大きい。

全身を硬そうな体毛で覆っており、所々に棘のような長い毛が生えている。

なにより特徴的なのは、両手に備わった巨大な爪だった。

一本一本が剣のように鋭く太く長い。

その凶悪な爪で、バスの外装を破壊し、導力機関まで傷つけたようだ。

ロイドは注意を引きつけるべく、武器で殴りつける。<sup>トンファー</sup>

「さあ、かかってこい！」

「歯応えありそうじゃねえか!!」

同じように、ランディも打撃を加えた。

頑強だ。さほど効いた様子はない。

それでも、自分たちへ魔獣の意識を向けさせることはできた。



バスから遠ざける。

ティオが魔導杖を突き出し、《アナライザー》を使う。

センサーを集中させて敵の情報を収集する、彼女の得意技だった。

「なっ!? これは、グランドリユーではありませんが……危険度、大……手強いです」

以前、同じタイプの魔獣とは戦ったことがあるが、これほど強くはなかった。

人間にも強い弱いがあるように、個体差があるのだろう。

得られた情報をティオが数値化して教えてくれる。

ロイドたちに戦慄が走った。

「そんなに強いのか!？」

「やばいぜ、ロイド……準備なしに戦える相手じゃない」

「くっ……」

「でも、まだ避難は終わってないわ!」

エリイの言うとおりだ。

リーシャとシュリが、バスの中に声をかけ、今、ようやくハッチが開けられたところだった。

白衣の青年と、看護師姿の女性が降りてくる。

「ロイド!? ロイドなの……!？」

「セシル姉!？」

バスに乗っていたのは、ロイドの姉のセシルと、研修医のリットンだった。

「ひっ!! た、た、たすけてっ!!」

「セシルさん! 今は、避難してください……!!」

「えっ!? リーシャさん!？」

「理由あつて手伝っています! さあ、急いで避難を!」

「そ、そうね!」

リーシャにうながされ、セシルがうなずく。

運転手も降りてきた。

「あ、ありがとうございます! バスに乗ってたのは、これで全員です!」

「急いで逃げてください!」

「はい! って……リーシャ・マオ!？」

どうやら、誘導は彼女たちに任せておいても大丈夫そうだ。

ロイドは魔獣に意識を戻す。

グランドリユーが、ぐんつと身体を反りかえらせる。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

恐ろしい雄叫びをあげる。



リットンが、腰を抜かしてしまった。

「ひっ……ひいひいひいひい!!」

「しっかりしてください、リットンさん！」

セシルに叱咤され、シュリに引張られて、彼は倒<sup>こ</sup>けつ転<sup>まろ</sup>びつ逃げはじめる。

「さあ、運転手さんも早く！」

「は、はい！」

リーシャに言われて、バスの運転手も走りだした。

街道をクロスベル方向へ逃げていく。

あとは、この魔獣を退治できれば、大丈夫だ。

「みんな！ 全力でいくぞ！」

「わかったわ！」

「おう、任せろ！」

「いきます……」

ティオが魔導杖の先端を、グランドリューに向けた。

「……ガンナーモード、起動します……オーバルドライバー、出力最大……………」

エーテル、バスター!!」

青白い閃光がほとばしる。

まぶしくて、目を開けていられないほど。

轟音が鳴りひびいた。

ティオの切り札であり、ロイドたちが使えるなかで、最も威力のある攻撃だ。ところが、ティオが息を呑む。

「……ッ!? 敵、反応あり！ しかも……そんな……」

ロイドは自分の目を疑ってしまう。

「なんだと!」

巻きあがった土煙が晴れたとき、そこには、さらに三体のグランドリューが現れていた。

ランディが舌打ちする。

「チッ……そういうことか。さっきの雄叫びで、仲間を呼びやがったな!」

「ど、どうするの、ロイド!」

エリイが拳銃を構えつつ尋ねてきた。

——時間を稼いで、逃走するか？

いや、ロイドたちはともかく、一般人であるセシルたちが、何セルジュも魔獣から走って逃げるなんて、無理だ。

彼女たちが遠くに逃げるまで時間を稼ぐのは、退治するよりも難しいだろう。

「俺たちが逃げるわけにはいかない……ここで倒すしかないんだ……!!!」



「そ、そうよね……」

「へへ！ とつとと終わらせようぜ！」

ランディが空元気で鼓舞する。

ティオがうなずいた。

「こんなところで……負けるわけには、いきません……」



リーシャは、バスに乗っていた人たちや、シュリを連れて街道を走っていた。

しかし、一般人の研修医や運転手は、早くもバテはじめている。

セシルだけは気丈に振る舞っているものの、彼女とて限界は近いだろう。

なにより、嫌な予感が消えていない。

（本当に危ないのは、こちらではなく……やっぱり、ロイドさんたち……）

「ちよっと休憩を入れましょう」

リーシャの声に、ぶはぁと男ふたりがへたりこんだ。

シュリが不満そうに嘆く。

「かぁー！ だらしないな！」

研修医のリットンが、息も絶え絶えに返す。

「ぜえ、ぜえ……そ、そう言わないでくれよ……僕はデスクワークのほう得意なんだ

……はあ、はあ……」

「わ、私も……持病の腰痛が……ううう……すみませんね、お客さん……」

運転手のほうも、これ以上は走れそうになかった。

戦闘の音が聞こえないくらいには離れたし、特務支援課が魔獣を退治できれば、十分に

安全だとは思うが……

おそろく、そこそが難しい。

（あの魔獣は、今のロイドさんたちでは……気配もひとつじゃなかったし……）

助けに行かなければ！

「あの、みなさん、ここで待っていてください。動けるようなら、できるだけクロスベルのほうへ」

シュリが目を丸くする。

「え？ リーシャ姉、どうする気だよ？」

「私は、ロイドさんたちの様子を見てくるわ」

「なっ!? なに言ってるんだよ!？」

「ごめんなさい、シュリちゃん……だけど、私、行かなくてはいけないから……」



「意味わかんないよ！」

唐突に、セシルが駆け寄ってきた。

リーシャは手を取られ、ぎゅっ、と両手で握られる。

「な、なんですか、セシルさん？」

「そう……そうなのね……リーシャさん……」

「えっ!？」

「今まで、気づかなかったけれど、あなたは……」

セシルが真剣な瞳で見つめてくる。

（ま、まさか……私が《銀<sup>イ</sup>》だとバレた!? ううん、いくらなんでも、そこまでは無理よね……でも戦える力を持つてゐることは気づかれたのかも? そういえば、この人は、イリアさんの親友だったっけ……）

セシルを紹介したとき、イリアは笑って言ったものだ。

「有能かと思えば天然で、生真面目かと思えば意外と話せる。そして、いざというときには鋭くて、よく助けてもらったものだわ」と。

それは、日曜学校での話だったが、あのイリア・プラティエが「鋭い」と評したのだ。ウルスラ病院でも、若くして看護師チーフを任されていると聞く。

「ううう……」

（よりにもよって、ロイドさんのお姉さんで、イリアさんの親友である、この人に見抜かれてしまうなんて……）

しかし、まだ確信はないはず。

誤魔化せるかもしれない。

「あ、あの、なにを感じられたか、わかりませんけど……私は、べつに……」

「いいのよ、隠さなくても。さっきの表情を見て、確信したわ」

「そんな!？」

リーシャは声から体格まで変えて、変装することができる。

演劇をはじめてからは、さらに磨きがかかったと自負していた。

（毎朝、鏡の前で表情の練習までしてるのに!）

セシルが微笑む。

「ぜんぶ、わかったわ、リーシャさん」

「くっ……どうやら、セシルさんには……き、気づかれましたったようですね……」  
声が震えた。

シュリが見つめている。

研修医や運転手が聞いている。

アルカンシエルでの日々を思い出して。

失われる光を想い。

涙がこぼれそうになる。

「わ、私は……ロ、ロイドさんが……」

——ロイドたち特務支援課が追っている、《黒月》<sup>ヘイユエ</sup>の協力者。東方人街の魔人。伝説の凶手。  
《銀》<sup>イシ</sup>

「リーシャさん、ロイドとお付き合ってるのね!」

「……………は?」

セシルが乙女な瞳をキラキラさせていた。

「さっきの表情を見て、ピン! ときたのよ。あれは、恋人を想う顔だって」

「い、いえ……あの……」

「ロイドもリーシャさんも、ひと言くらい教えてくれればいいのに。あつ、それとも、最近、お付き合いするようになったのかしら?」

「ちよつ……セシルさん……?」

「ああ、そうだわ! リーシャさんは、アルカンシエルのスターだもの。男性とお付き合いだなんて、絶対に知られたらいけないのよね!」

「まあ、仮に、恋人ができたとしたら……劇団長に相談して公表するタイミングは選ぶと思いますけど……つて、どうして、そういう話になってるんですか!」

「いいのよ! ぜんぶ、わかったから! ごめんなさい、私が軽率だったわね。これからは、影ながら応援させてもらうわ!」

もう彼女のなかでは、リーシャはロイドと秘密の関係にあるらしかった。

イリアが聞いたなら、脚本のネタとして喜びそうだが。

(ああ……そういえば……イリアさんから「天然」<sup>テンネン</sup>とも評されていましたね、セシルさん)  
脱力してリーシャは肩を落とした。この疲労感、マインツ山道を登ってきたよりも酷い。

シュリが顔を真っ赤にして、拳を握っていた。

「リーシャ姉! そうだったのかよ! オレにもナイショだったなんて! あ、でも、イリアさんは知ってるんだろ!」

「はあ……シュリちゃんまで……」

「あんなやつに、リーシャ姉はもつたないって思うけど! でも、ほ、他のヤツよりはマシだし……オレ、反対しないから……」

「あ、うん……そっか……」

リーシャだって、ロイドのことは憎からず想っているが、恋人になったわけでもないの



に、応援されたり、認められたりしても――

とっても切ない。

すごく恥ずかしい。

わりとみじめ。

しかし、ここで誤解を解くよりも、利用したほうが話が早そうだ。

（そうよね。私は《銀》――利用できるものはすべて利用する……それだけのことよね。ううう）

乙女心が痛すぎて、ちょっぴり涙が出てくるけれど。

リーシャはうなずいた。

「私、ロイドさんのところへ行かないと……わかってもらえますよね？」

「もちろんだわ！ 恋人が応援してくれたら、きっと励みになると思うの。ロイドのこと、よろしくお願いね！」

「リーシャ姉……幸せになってくれよな」

「う、うん……行ってきますー！」

顔を上気させているセシルとシユリと、ようやく息を整えた男たちに別れを告げて、リーシャは街道を戻る。

セシルたちの視界から隠れた。



次の瞬間――

黒衣の男が、大地を蹴った。



「だああああッ！ タイガー……チャージッ!!」

ロイドは必殺技を叩きこんだ。

「ギョアアアアアアア~~~~~!!」

絶叫をあげて、巨体が崩れ落ちる。グランドリューを一体だけ、ようやく退治できた。しかし、目の前には、まだ三体もの魔獣が爪を光らせていた。

多くの攻撃を受け止めたランディが膝をついている。

ティオは魔導力も体力も限界のようだ。

毒に犯されてエリイの顔色が青ざめている。

ロイドは渾身の大技で、なんとか一体を倒したものの、残る三体を相手にするだけの余力は、もう残っていないかった。

「くっ……こんなところで……」

負けられるものか！

武器を握る手に力を込める。

そのとき、上のほうから、聞き覚えのある声が降ってきた。

「――無様だな」

「なっ!?!」

振り向く。

街道をまたぐ形で吊り橋がかかっている。その支柱の上に、人影があった。

黒衣をまとい、顔を仮面に隠している。

歪められた声と、強烈な威圧感。

「あんたは……銀<sup>イシ</sup>!」

「ぐっ、くっ……やばいぜ、ロイド……こんなときに……」

ランディがうめく。

エリイとティオも武器を構えるが、戦う力など残っていなかった。

黒衣の男が、鼻で笑う。

「フ……その程度の雑魚に苦戦とは……相変わらず、非力な連中だ」

「ううう……」

ロイドには言い返すことができなかった。



銀<sup>イシ</sup>が殺意を放つ。

「……まとめて、始末してくれる!!」

「どれほど強大な相手でも……俺たちは絶対に諦めない!」

ロイドは菌を食いしばる。

——どうする!? 今、大技を受けたら、俺もみんなも耐えられない!

銀<sup>イシ</sup>が飛び上がった。

「我が舞は、夢幻<sup>むげん</sup>……去り逝く者への手向け……眠れ、銀<sup>しろがね</sup>の光に抱かれ……縛<sup>ばく</sup>ッ!!」  
両手から幾本もの鎖が伸びる。

巨大なグランドリューたち三体の動きを封じた。

「ギョワ!?」

「ギュルッ!?」

「グルアアッ!?」

悲鳴をあげ、身じろぎするが、魔獣たちが自由を得ることはない。

黒衣の男がローブ下から、巨大で幅広な刀を取り出した。

影が走る。

大刀<sup>だいとう</sup>が頑強な皮を裂き、肉を断ち、骨を砕いていった。

銀<sup>イシ</sup>が裂帛の気合いを放つ。

「ズウアアアアアアアア……滅<sup>めつ</sup>ッ!!」

「『ギユアアアア~~~~!!』」

魔獣たちが絶叫した。

次々と倒れ伏す。

「な……に!?!」

ロイドは自らの身体を確かめる。グランドリューとの戦いで負った傷はあるが、それだけだった。

「俺たちを……攻撃しなかった……のか?」

「フ……運だけはいいようだな」

相変わらず高い場所から、黒衣の男が言った。

助けられた?

まさか!

ロイドは問いただす。

「どういうつもりだ!? それに、どうして《黒月<sup>ヘイユエ</sup>》に雇われているはずの銀<sup>イシ</sup>が、マインツ山道なんかにな!?!」

「む」

「しかも、徒歩で……?」

「そ、それは……」

「それは……!？」

「……ハイキングだから」

「ん？　なんだって？」

わずかに沈黙があった。

「今、お前たちに教える必要は、ない」

銀<sup>イシ</sup>が背を向けた。

「どこへ行くつもりだ!？」

「フ……この場で、お前たちを始末するのは簡単だが……手負いを倒すほど退屈なことはない……私を捕らえたいのであれば、せいぜい強くなることだ」

「ま、待て！」

ロイドの声も虚しく、黒衣の男は姿を消してしまふ。

魔獣は消え、銀<sup>イシ</sup>もいなくなった。

「くっ……」

気を張っていたロイドだが、戦いが終わった途端、痛みに膝をついてしまった。

「大丈夫か、ロイド!？」

「あ、ああ……ランディこそ……」

「へッ、俺は氣力を溜めてたのさ。ヤツが近づいてきたら、一撃かましてやるつもりだったんだがな。逃げられちゃったか」

軽口を叩く彼に、ロイドは笑いかけた。

ティオがエリイの毒を除去する魔法<sup>アーツ</sup>を使う。

「ふう……どうですか、エリイさん？」

「ありがとう、ティオちゃん」

「それにしても、銀<sup>イシ</sup>の目的はいったい……あれでは、まるで、わたしたちを助けに来たようなものですが……?」

「不思議ね。伝説の暗殺者とまでいわれた銀<sup>イシ</sup>が、とくに用もないのに私たちを助けるとは考えにくいけど……」

「妙ですね……」

エリイとティオがそろって首をかしげた。

ロイドは立ちあがり、武器をしまう。

「よし……ひとまず、セシル姉たちと合流しよう」

うん、と仲間たちがうなずいた。



ロイドたちはクロスベル方面へと急いだ。  
戦いになる前に休んでいた、見晴らしのいい場所まで戻ると、そこにセシルたちが待っていた。

リーシャ、シュリと、研修医のリットンとバスの運転手もいる。  
セシルが手を振る。

「ロイドー!!」

「セシル姉、無事だったんだね!」  
急いで駆け寄った。

「ええ、ロイドとみなさんのおかげね……ありがとう」

「俺も他の人に助けられたんだけど……なんにしても、よかったよ」

ロイドは心から全員の無事を喜んだ。

ティオが、「エニグマで、クロスベルに連絡しておきました。しばらくすれば、救護車が来ると思います」と告げた。

エリイとランディがため息をつく。

リットンが天に向かって感謝の言葉をならべたてた。

「おお、女神さま、ありがとうございます! 助かった」  
エイドス

運転手が怖々と訊いてくる。

「す、すみません……あの大型の魔獣は、どうなったんですかね?」

「一体は俺が仕留めましたけど……他の三体は、通りがかりの銀が倒してくれたんです」

リーシャがすごく驚いた顔をする。

「銀……って、あの銀が現れたんですか!」

「ああ」

「インってなんだ?」

そういえば、シュリは前の事件のときは、まだアルカンシエルに在籍していなかった。

「東方人街の魔人なんて呼ばれてる伝説の暗殺者らしいんだけどな」

「悪いヤツなのか!」

「クロスベルでは、まだ大きな事件を起こしてないけど……放ってはおけない相手であることは確かだよ」

「そんなヤツが、通りがかって助けてくれるなんて、変じゃね?」

シュリの疑問は当然だ。

ロイドたちも感じていた。

ぱたぱた、とリーシャが手を左右に振る。

「き、きつと、なにか事情があったんじゃないでしょうか? 本人に聞いてみないと、正

解なんてわかりませんし……深く考えても仕方ありませんよ」

「そうだな……」

ロイドがうなずくと、なぜかリーシャが吐息をついた。

セシルが、じっと見つめてくる。

「ロイド、リーシャさんとは、どういう関係なの？」

「え？ まさかセシル姉、また勘違いしてるんじゃない……俺とリーシャは無関係というか……知人……いや、友人くらいだと思うよ」

「あ、あはは……」

リーシャが複雑な笑みを浮かべた。

セシルは不服そうだ。

「さつき、リーシャさんはロイドたちの応援に行ったのではなかったの？」

「いえ、何度も説明しているとおり、戦いの様子を見に行っただけです……で、でも、怖くて近くまで行けなくて……」

「そうだったのか」

ロイドは冷や汗をかいた。あのグランドリューと戦っているとき、リーシャが来ていたら守る余裕はなかった。

シュリが明るい表情を見せる。

「ははっ！ まあ、そんなこったろうと思ったぜ。おまえなんか、リーシャ姉はもったいなさすぎるもんな！」

「俺だって、そんなに大それたことは、考えたこともないよ」

ロイドは苦笑する。

リーシャが首を左右に振った。

「そんな！ 私なんて普通ですから、ロイドさんと不釣り合いなんてこと……あっ！ そのような意味ではなく……!!」

「はは……ありがとう、リーシャ。そんなふうに言ってもらえるなんてうれしいよ」

「あ、う……」

リーシャは耳まで赤くなっていた。

ロイドはうなずく。

「たしかに、俺たちの間で上とか下とか言うのも変な話だな。これからもよろしく頼む」  
「……はい」

どうやら恋人という仲ではないらしい、と納得してセシルは、ため息をついた。しかし、友人を得たことは喜んでくれているようだ。

シュリが、ロイドとリーシャの間に割り込んできて、ベタベタすんなよと邪魔をする。エリイとティオが、いつもの調子でジト目になっていた。



# FALCOM MAGAZINE SPECIAL

## プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で  
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント!



3名様

『も〜っと集まれ! ファルコム学園』缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント! ※絵柄はランダムです。

応募は特設サイトまで▶ <http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/>

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、(falmaga@field-y.co.jp) まで  
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名: vol.179プレゼント係

- 1: お名前(ペンネーム可)
- 2: 面白かった記事の番号→  
つまらなかった記事の番号→(記事一覧から1つずつ)
- 3: アンケート①2025年のファルコムで一番印象に残っている  
ことは?  
アンケート②『空の軌跡 the 2nd』発売決定についての感想  
は?
- 4: 希望するプレゼント番号
- 5: ご意見・ご感想など



### 記事一覧

- 1: 『空の軌跡 the 2nd』特集
- 2: も〜っと集まれ! ファルコム学園
- 3: ファルコムニュース
- 4: 英雄伝説 空の軌跡
- 5: 啄木鳥しんきのファルコム日和
- 6: 英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を

応募締め切り **1月26日(月)**

メールにてお送りいただくお名前や住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。  
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。

「はあ……あんなこと言つて、自覚がないなんて……」  
「……まあ、天然ですから」  
バスの運転手が、街道の先を指さす。  
「救護車だ! お~~~~い!」  
「おお、お助け〜!!」  
ずっと女神様に感謝を述べていたリットンが、両手をぶんぶん振りたくる。  
ランディが荷物を担いだ。  
「おっしー! 行くか」  
「ああ、戻ろう、クロスベルに!」  
ロイドの言葉に、みんながうなずいた。  
(ふう……)  
リーシャは安堵の吐息をついた。  
みんなが救護車へと乗りこんでいくのを一番後ろで眺める。  
ロイドたちの言動から、疑われている様子はなかった。  
証拠など残していないはず。  
そつとリーシャはつぶやくのだった。  
「……………大丈夫。バレてない……………よね?」

# 月刊 FALCOM MAGAZINE Vol. 179

発行人 田中一寿

発行協力 日本ファルコム株式会社

編集 小淵智幸  
河野崇

デザイン・DTP 株式会社 ACQUA

表紙ロゴデザイン 荻窪裕司（デザインクローパー）

発行 株式会社フィールドワイ  
〒101-0062  
東京都千代田区神田駿河台3-1-9 日光ビル3F  
TEL 03-5282-2211（代表）  
<http://www.field-y.co.jp/>

Copyright ©Nihon Falcom Corporation.All rights reserved.  
©2025 FIELD-Y  
©SHINKI KITSUTSUKI 2025  
©DAISUKE ARAKUBO 2025